

2017/3/16

(日々雑感 49)



要するに「義憤」なのだと思います。

今思えば親に「弱いものを庇って、強いものにくっついてかかる極めて正義感の強い子供だ」と言われた頃から、自分を突き動かしてきた大元にあったものは、少なくとも心の病から復活して以降の11年間は、間違いなく、いくら赤の他人とは言え、人をないがしろにしたり、ぞんざいに扱ったりしている理不尽さに対する「義憤」だったのだと思いました。昨日ある方の紹介で、もう一方「人生と起業の大先輩」にお会いして、その方がされるお話を伺っていると、一見「がらっぱち」ながら、あまりにも他人を気遣い、大切にされているのが感じられて、しかもその気遣いや心遣いを相手に負担を掛けない形でされているのをぼくの心の中で「目の当たり」に見て、つくづくそう感じたのです。

「昨今、我が国に於いては、このような方が、あまりにも少なくなっている。少なくなり続けている。そうではないひとが急速にドンドン増えている。増え続けている。とてもおかしい。何かとてもヘンだ」

とりわけ、この大先輩にお会いするためのレストランに行くまでのわずかな距離の歩道を歩いてすら毎度の事ながら、強くそう感じたのです。

それで

「このままでいいのか？何かしなくていいのか？見て見ぬふりでいいのか？」

となったのかどうかは、今少し確証が得られませんが、何かそのような物が常に心の中にあって、無意識にもその方向に従って進んできたような気がしました。

何かして貰ったら「ありがとうございます」とかならず言うところから始まって、自分もじいさんですが、もっとじいさんだったり、ばあさんだったりすると席を譲ったり、荷物を持ってやったり。

それは親切心からというより、そういったことに全く気づきもしない周りに対して「そのぐらいのことはしろよ！」という「義憤」だったような気がします。あるいは「当てつけ」「駆込み訴え」

そうして、それがだんだん高じて、心の病による会社での降格以降しばらくしてからです

が、危機に及んで、従業員を粗末に扱い始めた会社経営幹部に対する「義憤」から改革改善運動を立ち上げたり、心の病だと分かった途端、すーっとひいていった周りに対する「義憤」から、メンタルヘルスケアのコンサルティングを起業して、その人達の「リベンジの手伝い」をしようとしたりしたようです。

ここまで来るともうおわかりだと思いますが、その頃の自分が抱いていた「義憤」に対しては、先に述べた同じ「義憤」と言う言葉の意味の持たせ方と違い、あまり良い意味では使っていません。

義憤と言うより、さんざんな目に遭わされた人間が巧妙に隠し込んだ「復讐劇」あるいはそれこそ以前のドラマではありませんが「倍返し」でしかなかったのです。

途中までは良かったのです。ところがあるところから変質してしまったようです。人を思う気持ちの中に、いつしか自分の事情や都合が多く入り込むようになった時点から。

昨日、お二方にお会いしたのは、それに改めて気づかされるとても良い機会になりました。

もう一度気持ちをリセットして、濁りを取り除き、はじめの頃に抱いたピュアな「義憤」に立ち返りたいと思っております。